津和野町埋蔵文化財報告書第３集

－ 町道善正寺平線新設工事事業に伴う －

御茶屋床上遺跡

２００７年３月

島根県津和野町教育委員会

津和野町埋蔵文化財報告書第３集

― 町道善正寺平線新設工事事業に伴う ―

御茶屋床上遺跡

２００７年３月

島根県津和野町教育委員会

例　　言

1．本書は、島根県鹿足郡津和野町教育委員会が平成17年度に行った町道善正寺平線新設工事事業に伴う、御茶屋床上遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、島根県教育委員会文化財課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導	島根県教育委員会文化財課		
	広島県立美術館学芸課長		村上　勇
	梅光学院大学教授		渡辺　一雄
事務局	津和野町教育委員会	教育長	斎藤　数弘
		教育次長	廣石　修
		文化財係	米本　潔
調査員	津和野町教育委員会	係　長	中井　將胤
		文化財係	宮田　健一
調査補助員	永田　茂美　濱浦　健太　椋木　牧子　麻野　遥		
調査参加者	山田　頼之　大庭　学　大井　將正　久保　政幸　井筒　一洋		
	吉永　種男　小山　博道　河田　照雄　佐藤　武文　佐伯　昌俊		

3．発掘調査に際しては、島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただき、また梅光学院大学の渡辺一雄教授からも一方ならぬお世話をいただいたことに対し、ここに合わせて感謝の意を表したい。

また、発掘現場においては、所有者の中川佳彦氏をはじめとし、地元の方々にご協力を得るなど、ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4．今回の調査において、溝状遺構－ＳＤと略号している。なお、現場あるいは編集に利用した現地地図は、日原土地改良区の協力を得た1／1000の縮尺のものであり、また、位置図などは1／25,000を使用した。なお、現地における基準点測量は、株式会社ワールドの協力を得て行った。

5．調査に伴う記録類及び出土遺物は、津和野町教育委員会で保管している。

6．本書は宮田・永田・濱浦・椋木・佐伯・麻野氏の協力のもと、中井將胤が編集にあたった。

目　次

第１章　発掘調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　発掘調査の経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の経過 …… 1

第２章　地区の概況 …… 2
　第１節　地理的環境と地形的立地 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2

第３章　調査概要 …… 4
　第１節　調査区の設定 …… 4
　第２節　層序と層位 …… 5
　　１．はじめに …… 5
　　２．Ａ区の層序状況 …… 5
　　３．Ｂ区の層序状況 …… 5
　　４．Ｃ・Ｄ区の層序状況 …… 5
　　５．調査区全体の層序状況 …… 5
　第３節　遺構 …… 7
　　１．はじめに …… 7
　　２．検出遺構 …… 7

第４章　出土遺物 …… 8
　第１節　はじめに …… 8
　第２節　実測遺物 …… 9
　　１．石器類 …… 9
　　２．陶磁器類 …… 12
　　３．その他 …… 12

第５章　小　　結 …… 16

挿図・図表目次

第１図　位置図 …… 1

第２図　地形断面図 …… 2

第３図　位置と周辺の遺跡分布 …… 3

第４図　調査区配置図 …… 4

第５図　調査地区名図 …… 4

第６図　土層図 …… 6

第７図　遺構図 …… 7

第８図　遺構土層図 …… 7

第９図　遺物実測図１（石器） …… 9

第10図　遺物実測図２（陶磁器類１） …… 11

第11図　遺物実測図３（陶磁器類２） …… 13

第12図　遺物実測図４（その他１） …… 14

第13図　遺物実測図４（その他２） …… 15

第１表　遺物出土状況表 …… 8

第２表　出土遺物計測表 …… 10

図　版　目　次

図版１　１　調査地点鳥瞰

図版２　１　南からみた遺跡の近景　２　北からみた遺跡の近景

図版３　１　Ｂ調査区北壁　２　Ｂ調査区南壁
３　Ｃ調査区南壁

図版４　１　ＳＤ０１検出状況（南から）　２　ＳＤ０１・０２完掘状況
３　ＳＤ０１土層（北側）

図版５　１　石器出土状況　２　土錘出土状況
３　陶磁器出土状況　４　陶磁器出土状況
５　陶磁器出土状況　６　古銭出土状況

図版６　１　発掘作業風景　２　発掘作業風景
３　発掘体験授業風景（青原小学校）

図版７　１　発掘調査完掘状況（北から）　２　発掘調査完掘状況（南から）

図版８　１　出土遺物（石器）　２　出土遺物（陶磁器類１）
３　出土遺物（陶磁器類２）　４　出土遺物（陶磁器類３）

図版９　１　出土遺物（陶磁器類４）　２　出土遺物（その他１）
３　出土遺物（その他２）　４　出土遺物（その他３）

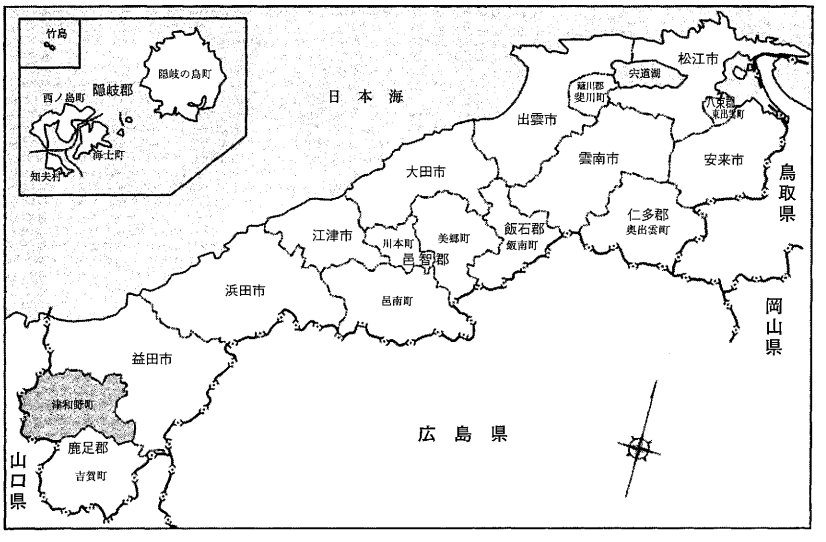
第１章　発掘調査の経緯と経過

第１節　発掘調査の経緯

平成17年８月、建設課より町道善正寺平線新設工事地内の埋蔵文化財の有無、及び取扱いについての照会が日原町教育委員会になされた。これに対して日原町教育委員会では、対象地に隣接して青原代官所、青原代官屋敷遺跡（古墳時代）があることから、試掘調査による確認が必要である旨を回答した。そして試掘調査を、平成17年９月１日から同年９月15日まで実施し、２箇所の地点から陶磁器等の遺物が出土したため、遺跡の所在が明らかになった。

本遺跡は、島根県鹿足郡津和野町青原に所在し、その地点の地名が御茶屋床上（おちゃやどこかみ）と呼称されていることから御茶屋床上遺跡と命名した。

試掘調査では、第２層橙褐色土から第４層灰褐色粘質土までの範囲から江戸時代の陶磁器が出土している。しかし、遺構等は確認することは出来ず、試掘調査という狭い調査範囲からでは遺跡の全容を明らかにすることはできなかった。



第１図　位置図

第２節　発掘調査の経過

上記のとおり、本地点が遺跡であることが確認されたため、平成17年９月15日、島根県教育委員会文化財課の丹羽野氏、旧津和野町教育委員会の宮田氏から現地指導を受け、同年度において本格調査を実施することにした。なお、９月25日に合併を控えていたため、本格調査の実施は新町になってからの新体制で行うことにした。

合併後、平成17年11月14日付で、島根県教育委員会宛に埋蔵文化財発掘調査の書類を提出し、調査は同年11月17日から行った。調査中には、島根県教育委員会文化財課の東森氏から、今後の調査方法や出土遺物についての指導を受けた。そして、現地調査は平成18年２月６日に無事終了した。

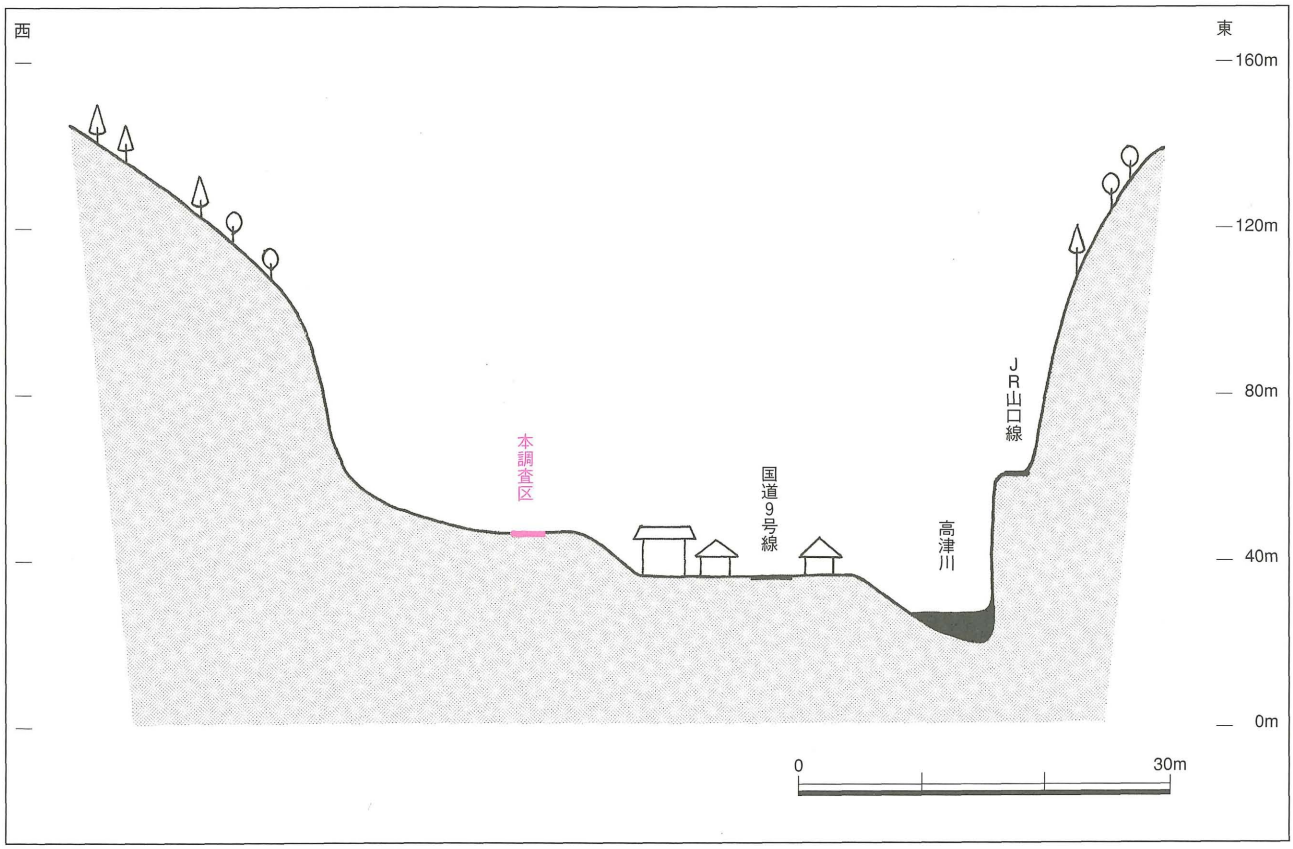
さらに、平成18年３月17日には、広島県立美術館の村上氏、梅光学院大学の渡辺教授、県文化財課の西尾氏が来町され、出土遺物についての指導を受けた。

第２章　地区の概況

第１節　地理的環境と地形的立地

本遺跡が所在する津和野町は、島根県西部に位置（第１図）し、平成17年９月25日に合併が行われたため、現在では北・東側が益田市、南側が吉賀町、西側が山口県に接した位置に存在する。そして、東西27km、南北19kmを測り、総面積307.09km²となる。また、総面積の約８割以上が山林で、高津川や津和野川の流域とその支流が入り込み、流域に市街地、集落、農地が点在し、まさに典型的な中山間地域である。

本遺跡は、島根県津和野町青原301番地に所在し、本町の北東部にあたる、益田市との町境に位置する。該当地は南西から北東方向に流下する高津川の左岸にあり、西側山の山裾からなる河岸段丘上、標高約46.1mを測る位置に立地している（第２図）。



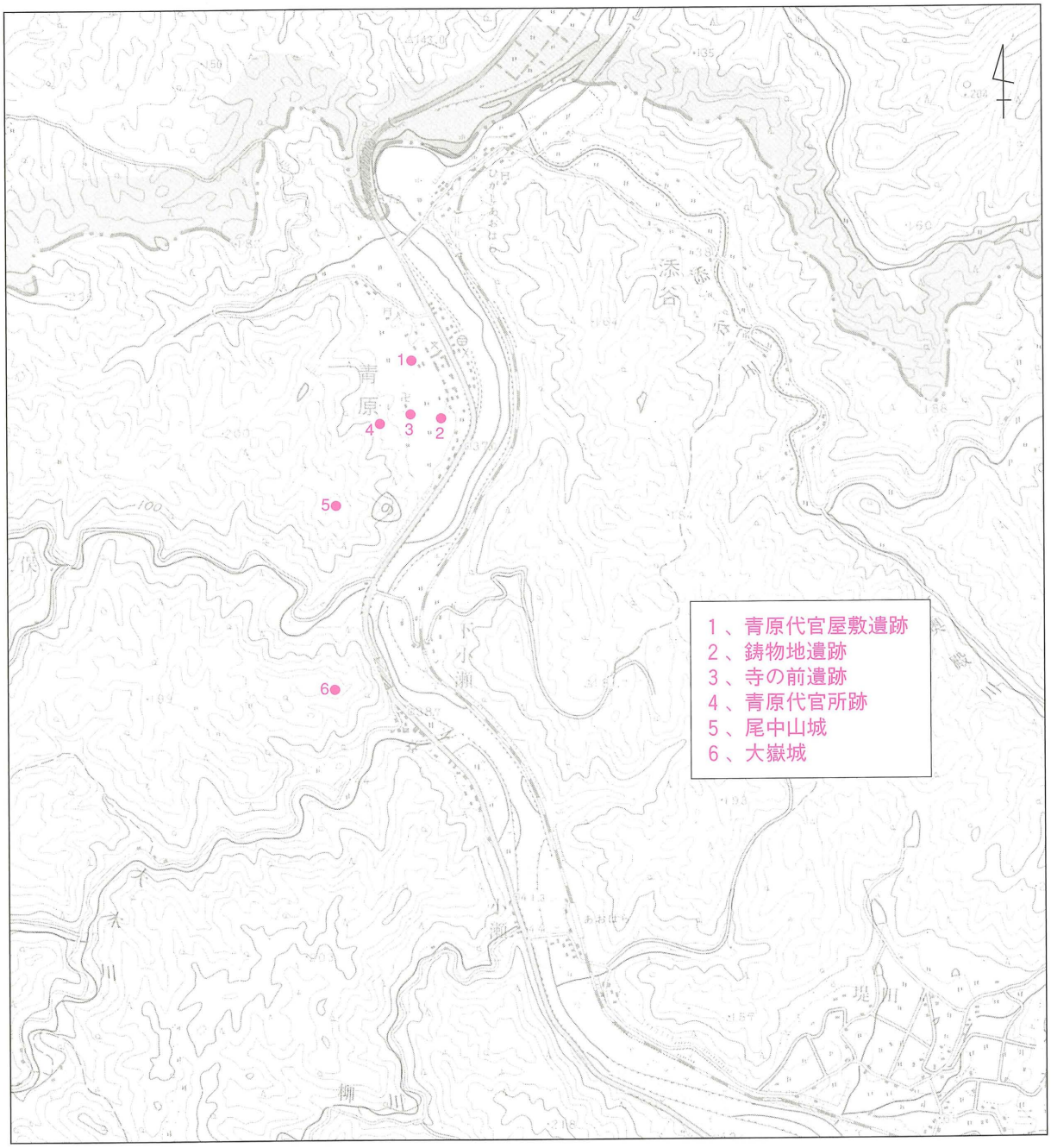
第２図　地形断面図

第２節　歴史的環境

本地区における遺跡は（第３図）、青原代官屋敷遺跡と平成13年度に行われた試掘調査おいて確認された寺の前遺跡、鋳物地遺跡がある。本遺跡の北側に隣接する青原代官屋敷遺跡では古墳時代の須

恵器片が見つかっている。また、南側に位置する寺の前遺跡、南東側に位置する鋳物地遺跡は、いずれも縄文時代の石器、中世・近世期の陶磁器片などが出土している。ただし、これらの遺跡はいずれも本格調査を実施していないので遺跡の全貌は明らかにされていない。

中世以降の史跡等においては、比較的多く分布しており、本遺跡を中心に南西側には中世の山城である尾中山城、大嶽城がある。また南東側300m、東側100mの所には宝篋印塔や五輪塔などの中世時代の石造物も数基現存する。北東側の本遺跡と隣接する地点は、津和野藩の青原代官所跡があり、特に江戸時代においては宿場町として栄え、立地的にも交通の要所となる地域であった。そのため、多くの人々がこの地で生活を営んでいたと考えられる。また、全国測量をした伊能忠敬一行が、山陰道の測量調査時に青原で宿泊しており、そのことが『伊能忠敬　測量日記　第３巻』に記載されている。



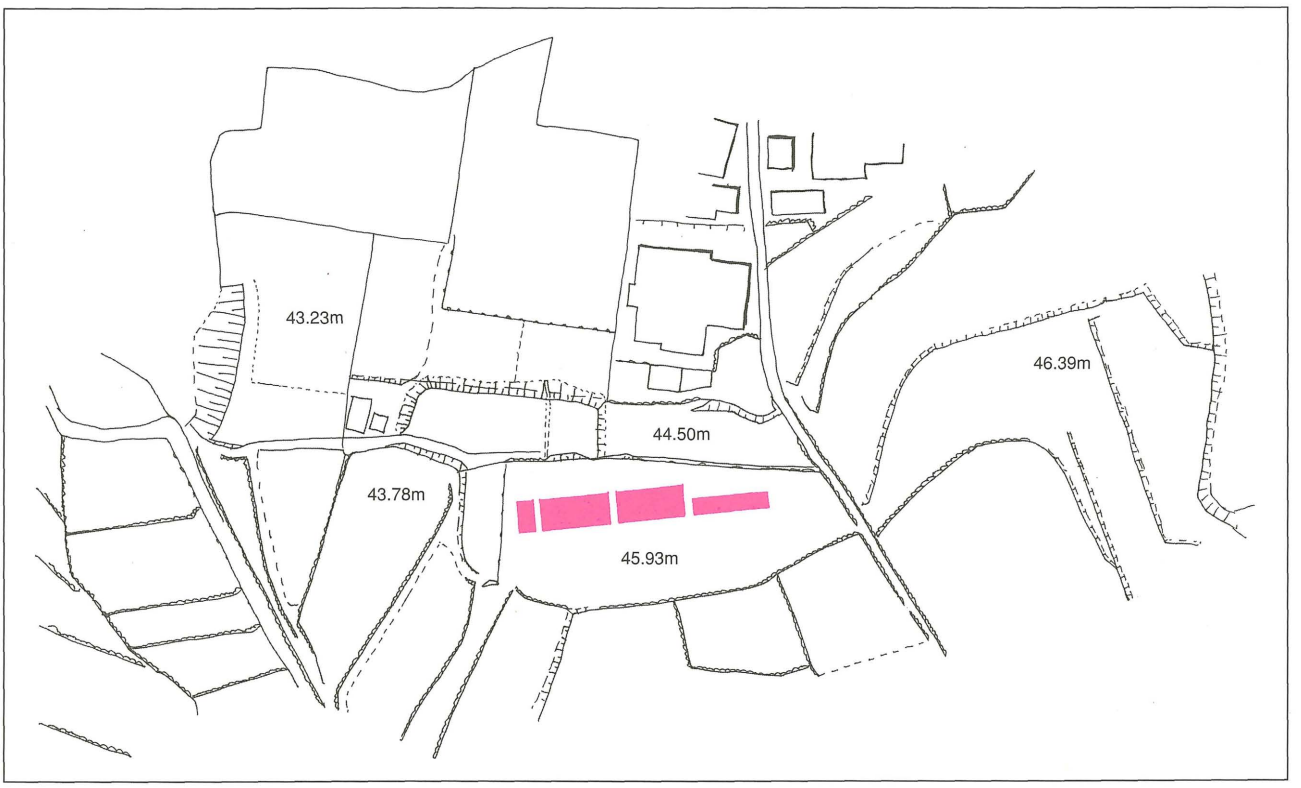
第３図　位置と周辺の遺跡分布

第３章　調査概要

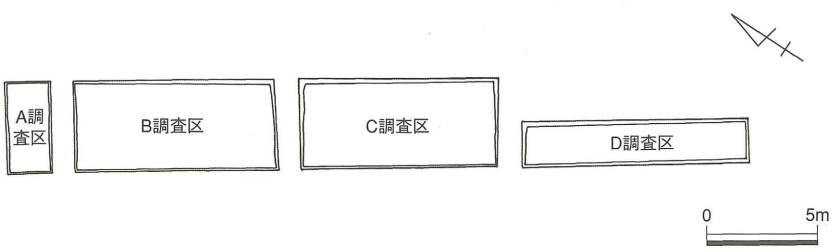
第１節　調査区の設定

平成17年９月に実施した試掘調査地点を中心に本格調査区を設けることにした。まず最初に、東西に道路幅である４ｍを設定し、南北に９ｍの長方形区を設けた。次いで南側に幅１ｍを測るベルトを残し、南北に４ｍ×９ｍの長方形区を設け、さらに南側へ幅１ｍのベルトを残し２ｍ×10ｍの長方形区を設定した。そして遺跡の範囲を確認するため一番北側の調査区から幅１ｍのベルトを残し４ｍ×２ｍの長方形区を設けることにした。そして調査面積は、合計132㎡を測る（第４図）。

最終的に、これらの調査区を北側からＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ区とした。また、それぞれの調査区の間にあるベルトは掘削せず残すことにした（第５図）。



第４図　調査区配置図



第５図　調査地区名図

第２節　層序と層位

１．はじめに

本節で記している土層の色彩は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人　日本色彩研究所が監修している、小山正忠・竹原秀雄　著『新版　標準土色帖　2004年版』を使用している。

２．Ａ区の層序状況

Ａ区の基本層序は、１層の灰黄色粘質土（Hue 10YR 4／2耕作土）が地山の上に盛った状況にある。おそらく水田開発のために地山を掘削し、平坦にした上に耕作土を盛ったものと思われる。

３．Ｂ区の層序状況

Ｂ区の基本層序は、北側と南側では層序が異なる。まず北側からみると、上位から１層の灰黄色粘質土（Hue 10YR 4／2耕作土）、２層の褐色粘質土（Hue 10YR 4／6）、３層のにぶい黄褐色粘質土（Hue 10YR 4／3）で酸化鉄を多く含む、４層の褐色粘質土（Hue 10YR 4／4）である。調査区の中央部から南側に向けて２層の下位面が１層増えるため、北側の３・４層は南側の４層・５層と同じである。

そして、南側は上位から１層の灰黄色粘質土（Hue 10YR 4／2耕作土）、２層の褐色粘質土（Hue 10YR 4／6）、３層の褐色粘質土（Hue 10YR 4／4）、４層のにぶい黄褐色粘質土（Hue 10YR 4／3）で酸化鉄を多く含む、５層の褐色粘質土（Hue 10YR 4／4）、６層の褐色粘質土（Hue 10YR 4／4）で５層よりやや明るい、７層のにぶい黄褐色粘質土（Hue 10YR 4／3）で酸化鉄を含む層の順で堆積していた（第６図・図版３）。

４．Ｃ区・Ｄ区の層序状況

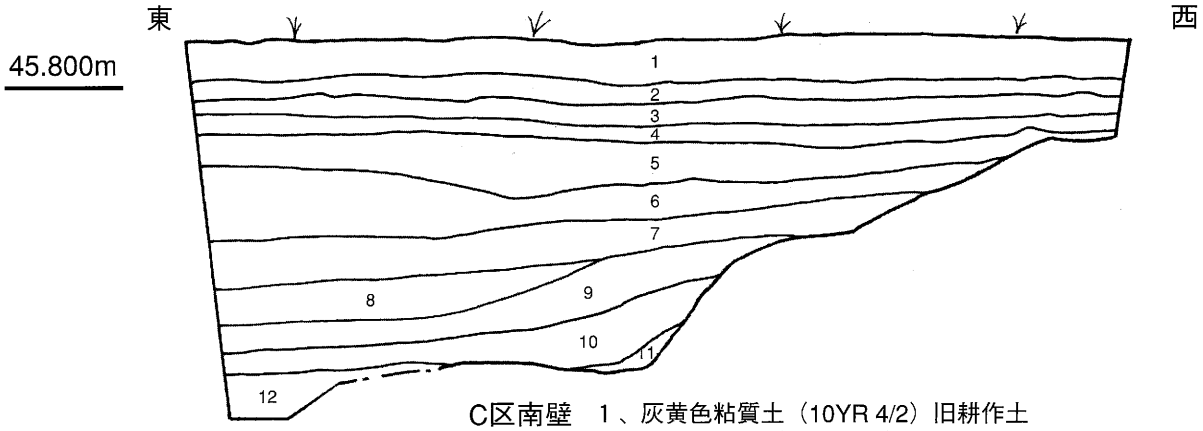
Ｃ区北側は、Ｂ区同様１層から７層で、調査区中央付近から８層のにぶい黄褐色粘質土（Hue 10YR 5／3）が混入し、９層のにぶい黄褐色粘質土（Hue 10YR 4／3）、10層のにぶい黄褐色粘質土（Hue 10YR 5／4）、11層の褐色粘質土（Hue 10YR 4／6）、12層の褐色粘質土（Hue 7.5YR 4／6地山）の順で堆積していた。しかし、Ｄ区については、Ｃ区南側とほぼ同様な層序になるが、11層だけは確認できなかった（第６図）。

５．調査区全体の層序状況

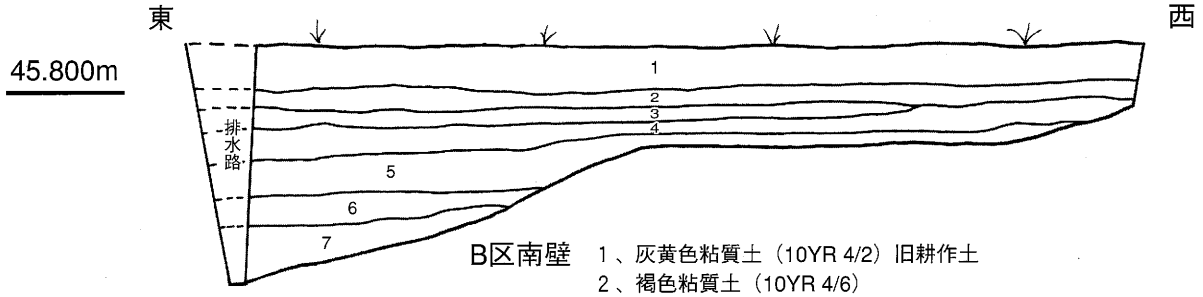
以上Ａ～Ｄ区の層序をそれぞれ検証した結果、本来の地形は北西側が高く、南西側へ向って傾斜していた地形だったと推定される。そのため、北西側を掘削し南西側へと土を移動させ水田耕作に適した形に開発し、確認できる範囲で２度にわたり水田の開発が行われたと想像された。

層厚については、１層の耕作土が約20cm、２層から４層が約10cm、５層から７層までは約20cmを測り、ほぼ平均に堆積している。８層については、Ｃ区中央部がら南西へと堆積している。９・10層は、地山に沿ったかたちで堆積しており、層厚は約20cmを測る（第６図）。

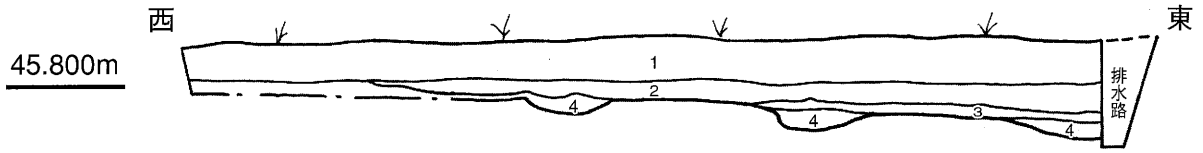
遺物の出土状況としては、３層から７層において多くの陶磁器片などが出土し、８層以降からは、数点の陶磁器が確認されたのみであった。出土遺物の中には石器なども確認されたが、陶磁器と同層から出土しており、そのことからも水田開発により撹乱された層であることを裏付けるものであった。



C区南壁　1、灰黄色粘質土（10YR 4/2）旧耕作土
2、褐色粘質土（10YR 4/6）
3、褐色粘質土（10YR 4/4）
4、にぶい黄褐色粘質土（10YR 4/3）酸化鉄を多く含む
5、褐色粘質土（10YR 4/4）
6、褐色粘質土（10YR 4/4）5層よりやや明るい
7、にぶい黄褐色粘質土（10YR 4/2）酸化鉄を含む
8、にぶい黄褐色粘質土（10YR 5/3）
9、にぶい黄褐色粘質土（10YR 4/3）
10、にぶい黄褐色粘質土（10YR 5/4）
11、褐色粘質土（10YR 4/6）
12、褐色粘質土（7.5YR 4/6）地山

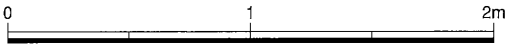


B区南壁　1、灰黄色粘質土（10YR 4/2）旧耕作土
2、褐色粘質土（10YR 4/6）
3、褐色粘質土（10YR 4/4）
4、にぶい黄褐色粘質土（10YR 4/3）酸化鉄を多く含む
5、褐色粘質土（10YR 4/4）
6、褐色粘質土（10YR 4/4）5層よりやや明るい
7、にぶい黄褐色粘質土（10YR 4/2）酸化鉄を含む



B区北壁　1、灰黄色粘質土（10YR 4/2）旧耕作土
2、褐色粘質土（10YR 4/6）
3、褐色粘質土（10YR 4/4）
4、にぶい黄褐色粘質土（10YR 4/3）酸化鉄を多く含む

B区の北壁の3，4層は、C区の南壁の4，5層にあたる



第6図　土層図

第３節　遺　構

１．はじめに

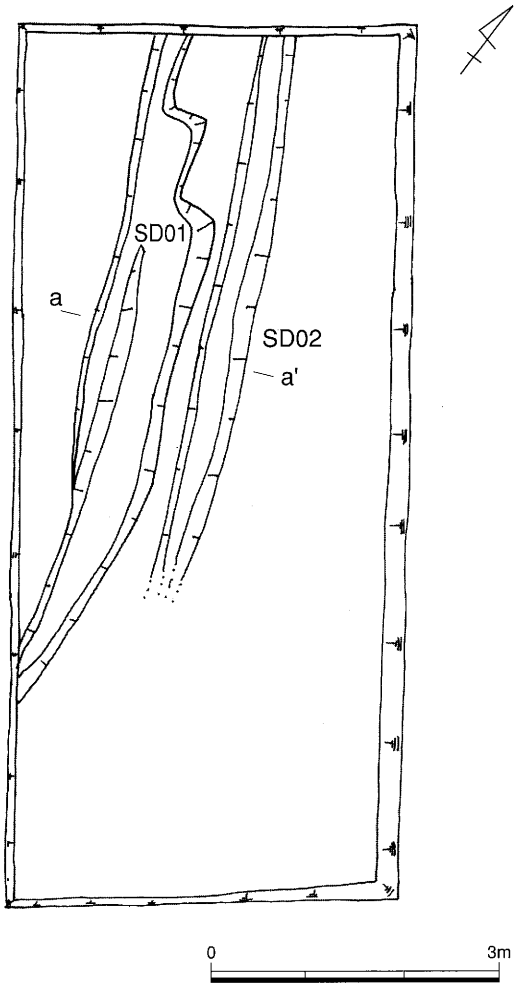
本節で述べる遺構については、確認できたものがＢ区で検出された溝状遺構のみであったため、その遺構について報告する。また、検出遺構の形状からＳＤと略号した（第７図・図版４）。

２．検出遺構

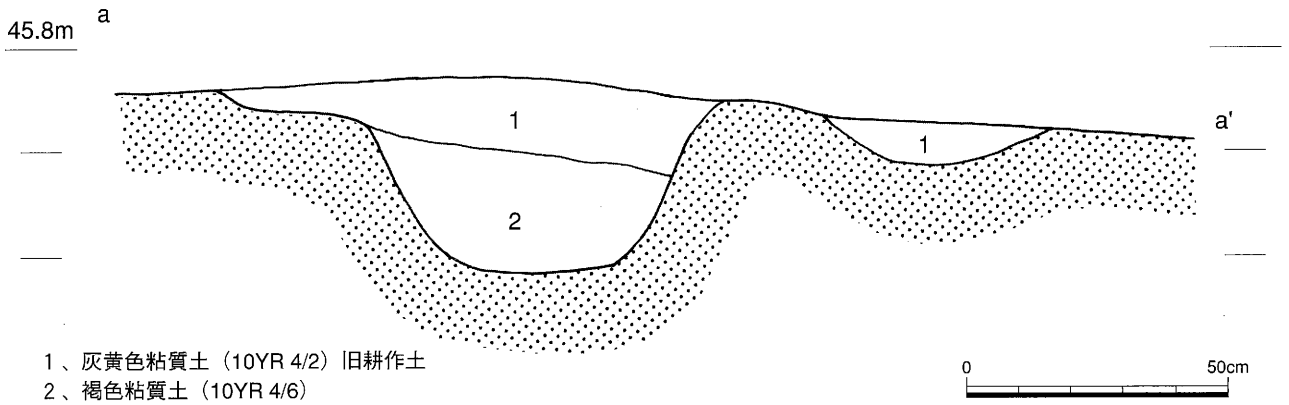
ＳＤ01と称した遺構は、Ｂ区の西側、標高45.7m地点において検出された。本遺構は、地山を溝状に掘削して作られており、幅40cmから90cm、深さが浅いところで５cm、深いところで37cmを測り、調査区北西側から南方向に確認されている。検出状況から判断すると、幅・深さ共に一定ではなく、特に一部分が長方形状に深く彫り込んだ箇所もあり、溝状遺構と判別したが実際の用途は不明である。

ＳＤ02と称した遺構は、ＳＤ01遺構の東側に平行する形で検出された。本遺構は、ＳＤ01同様に地山を溝状に掘削しており、幅約50cm、深約８cmを測る。比較的浅い溝の跡と考えられた。

以上、簡単にＳＤ01、02について述べたが、狭い範囲の調査のため、遺構全体を確認することができず、いずれも遺物等を伴わない状況での検出であった。そのため、作られた時期や用途については不確定な部分が多い結果となった。なお、ＳＤ01については調査区の南西側へ続くと思われた。



第７図　遺構図



１、灰黄色粘質土（10YR 4/2）旧耕作土
２、褐色粘質土（10YR 4/6）

第８図　遺構土層図（北壁）

第４章　出土遺物

第１節　はじめに

本調査においての出土遺物は、石器類４点、土師質土器類103点、陶磁器類766点、土錘７点、鉄器類54点、古銭２点、煙管３点、瓦12点、瓦質53点、須恵器１点その他５点の総数1,010点であった。遺物の出土状況は、調査区、層位ごとに遺物出土状況表（第１表）で示した通りである。また、実測を行った出土遺物の内訳は、出土遺物集計表（第２表）に示しているとおりである。

なお本遺跡は、層序の節でも述べたが、ほとんどの遺物は水田開発等に伴い撹乱された層中に出土した可能性があった。そのことを最初に断った上で、次節において実測遺物を種類別に詳細に記述していくことにする。

第１表　遺物出土状況表

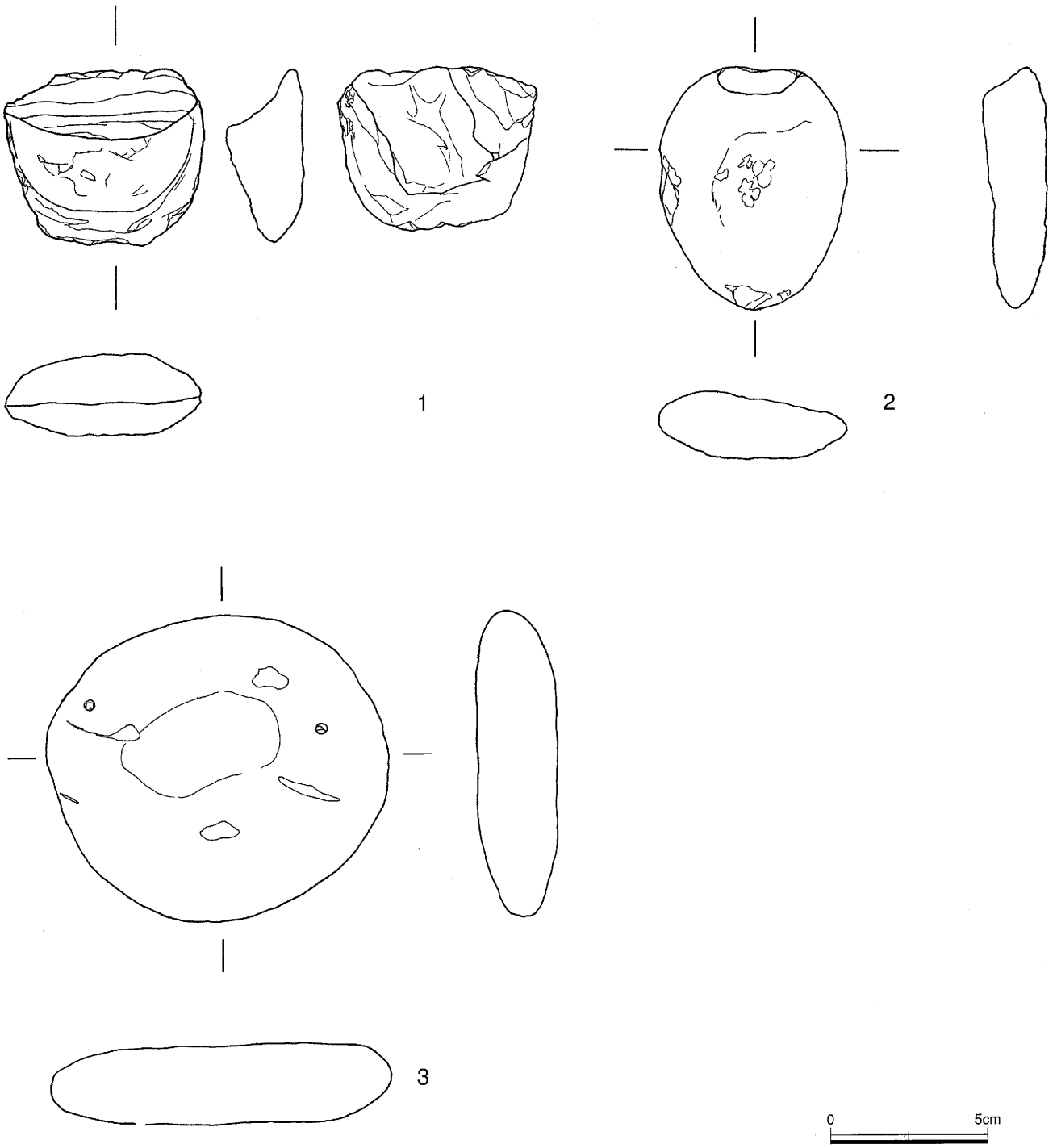
<table>
<tr><th rowspan="2"></th><th rowspan="2">A区</th><th colspan="2">B区</th><th colspan="2">C区</th><th colspan="2">D区</th></tr>
<tr><th>北側</th><th>南側</th><th>北側</th><th>南側</th><th>北側</th><th>南側</th></tr>
<tr><td>２層</td><td>T:19 Fe:1</td><td colspan="2">T:64 Fe:1 K:3 Ga:10 炭:1</td><td>T:57 H:2 Fe:1 Ga5 Z:1</td><td>T:64 H:4 Fe:4 Gl:1 Ga:1 K:3</td><td colspan="2">T:125 H:10 Fe:6 C:1 K:2 Ga:6</td></tr>
<tr><td>３層</td><td>T:7 H:1</td><td>T:45 H:2 Fe:4 P:1 D:1 Ga:7 玉:1</td><td>T:33 H:4 Fe:2</td><td>T:58 H:9 Fe:6 Ga:2</td><td>T:57 H:3 K:2 Ga:9</td><td>T:36 Fe:3 D:1 P:1 Ga:1 S:1</td><td>T:5 H:3 Fe:1 Ga:3</td></tr>
<tr><td>４層</td><td></td><td></td><td>T:15 H:1 Ga:1</td><td>T:9 H:1 K:1 Ga:1</td><td>T:20 H:6 Fe:1</td><td>T:26 H:14 Fe:3 P:1 Ga:2 玉:1</td><td>T:18 H:5 Fe:6 C:1Ga:1</td></tr>
<tr><td>５層</td><td></td><td></td><td></td><td colspan="2">T:33 H:15 Fe:10 D:1 Su:1 S:2</td><td>T:15 H:1 D:1 Fe:1</td><td>T:9 D:1 Ga:1</td></tr>
<tr><td>６層</td><td></td><td></td><td></td><td colspan="2">T:9 H:2 D:1 K:1 Ga:1</td><td colspan="2">T:25 H:7 Fe:4 Ga:2 S:1</td></tr>
<tr><td>７層</td><td></td><td></td><td></td><td colspan="2">T:13 H:9</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>８層</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>９層</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>10層</td><td></td><td></td><td></td><td colspan="2">T:8 H:4 D:1</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>合計</td><td>T:24 H:1 Fe:1</td><td colspan="2">T:157 H:7 Fe:7 D:1 P:1 K:3 Ga:18 玉:1 炭:1</td><td colspan="2">T:324 H:55 Fe:22 D:3 K:7 Ga:19 Gl:1 Su:1 S:2 Z:1</td><td colspan="2">T:259 H:40 Fe:24 D:3 C:2 P:2 K:2 Ga:16 S:2 玉:1</td></tr>
</table>

T：陶磁器 766　S：石器４　H：土師質 103　Fe：鉄器類 54　D：土錘７　C：古銭２　P：キセル３　K：瓦 12　Ga：瓦質53　Gl：ガラス１
玉：鉄砲の玉２　Su：須恵器１　炭：炭１　Z：プラスチック１

第２節　実測遺物

１．石器類

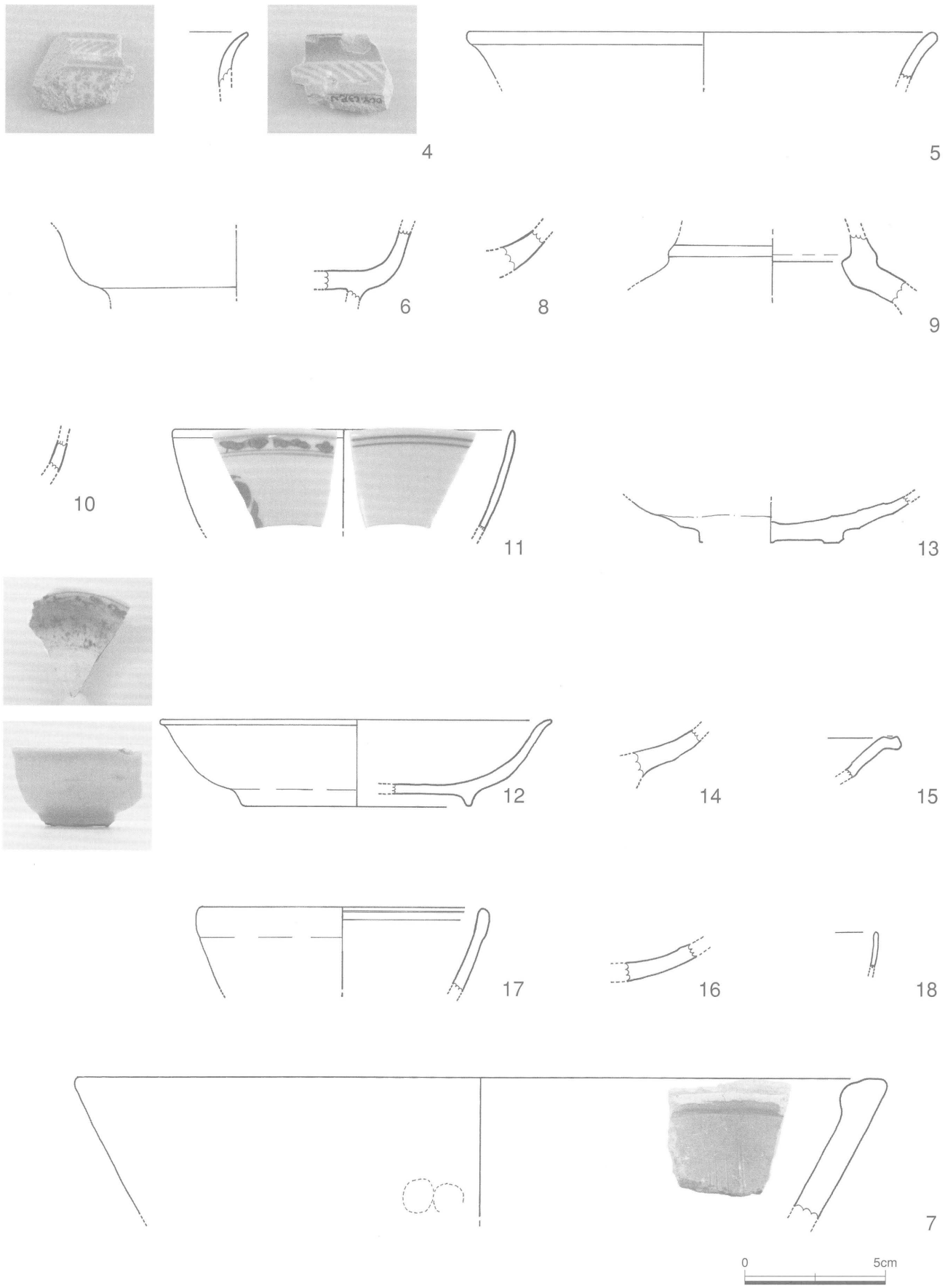
１は、磨製石斧で先端部が剥離している。２は、敲石で両面が平坦石で、長い部分の両端に剥離跡がみられる。３は、敲石で両面が平坦に近い石を用いており、直径３mmの穴が２点認められる。１～３の年代は土器等を伴わないため確かなことはわからない。また、２，３については用途も不明である。



第９図　遺物実測図１（石器）

第２表　出土遺物計測表

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	色調	色調	胎土・焼成	備考
1	C区　5層	磨製石斧	長さ 6.3	幅 7	高さ 2.9				先端部　剥離有
2	C区　5層	石器	8.6	6.6	2.4				
3	D区　6層	石器	10.8	12.1	2.8	中央部がかすかに凹む、直径3mmの穴2点あり			
4	C区3層N	磁器				李朝 口縁部は外側へ大きく反る	胎：灰白色 釉：オリーブ灰色		体～口縁部の片 15ｃ後半
5	D区5層N	磁器 碗	18.6			中国青磁，口縁は外側に広がる	胎：灰白色 釉：灰オリーブ色		体～口縁部の片 15ｃ後半
6	B区3層S	磁器 香炉				中国青磁	胎：灰白色 釉：オリーブ灰色		高台～体部の片 15～16ｃ
7	B区4層S	瓦質土器 擂鉢	31.6			口縁部は逆「八」字状に広がり、内側に膨らみをもつ，指圧痕	外内：灰色		体～口縁部の片 15～16ｃ
8	C区　7層	磁器 碗				中国青磁	胎：灰白色 釉：オリーブ灰		体部の片 15～16ｃ
9	C区3層S	磁器 壺	（頸部内径） 5.4			中国青磁	胎：灰白色 釉：オリーブ灰色と緑黒色		体～頸部の片 15ｃ？
10	C区4層S	磁器				中国青磁	胎：灰白色 釉：灰オリーブ色		体部の片 16ｃ
11	C区　10層	磁器 碗	13.4	高台径 9		中国青花	胎：灰白色 釉：灰白色		体～口縁部の片 16ｃ後半
12	C区　7層	陶器 鉢	15.4	高台径 5.8	3.4	中国青花 口縁は外側に広がる	胎：灰白色 釉：オリーブ灰色		高台～口縁部の片 16ｃ～17ｃ
13	C区　10層	陶器 皿				唐津焼	胎：にぶい褐色 釉：オリーブ灰色		高台～体部の片 17ｃ前半
14	C区3層S	陶器				唐津焼	胎：にぶい黄橙色 釉：にぶい灰オリーブ		体～口縁部の片，17ｃ前半 外側一部にくすんだ赤い土が見られる
15	D区　2層	陶器 皿				唐津焼	胎：灰色 釉：灰オリーブ色		体～口縁部の片 17ｃ中頃
16	C区2層N	陶器 碗				唐津焼	外内：灰オリーブ色		底～体部の片 17ｃ
17	D区　6層	磁器 碗？	11.6			青磁	胎：灰色 釉：灰オリーブ色		体～口縁部の片 17ｃ後半～18ｃ
18	A区　3層	陶器 茶碗					外内：灰白色		体～口縁部の片 18ｃ頃
19	A区　3層	磁器				伊万里焼	胎：灰白色 釉：明緑灰色		高台～体部の片 18ｃ頃
20	B区4層S	磁器 茶碗	11.1	高台径 4.8	5.3		胎：灰白色 釉：緑灰色		高台～口縁部の片（底部1/4遺存） 18ｃ後半
21	C区3層N	陶器 碗		高台径 3.4			胎：くすんだ浅黄橙色 釉：明オリーブ灰色		底部の片 18ｃ
22	D区3層N	陶器				陶胎染付	胎、釉：灰色		体部の片 18ｃ
23	C区3層S	陶器 小鉢	14				胎：灰黄色 釉：オリーブ色		体～口縁部の片 18ｃ
24	C区3層S	陶器 碗		高台径 5.2		（長）萩焼	胎：灰黄色 釉：オリーブ黄色		体部の片 19ｃ前半
25	C区2層N	陶器				唐人焼	外内：オリーブ灰色		体部の片
26	C区2層N	磁器				肥前陶胎染付 口縁部に凹みが見られる	外内：くすんだ灰白色		体～口縁部の片
27	D区4層S	陶器				須佐唐津	外：暗褐色 内：淡黄色		体～口縁部の片
28	C区3層N	陶器 擂鉢				備前焼	外内：にぶい赤褐色		底部の片
29	B区3層S	陶器 擂鉢				逆「八」字状に広がる口縁部	外：黒褐色 内：にぶい赤褐色		体～口縁部の片
30	A区　3層	土師質 擂鉢					外：浅黄橙色 内：橙色		高台～体部の片 18ｃ
31	A区　3層	土師質		7		回転糸切り痕	外内：浅黄橙色		体部の片
32	C区　5層	土師質 鉢？		3.8			外内：橙色		底部の片
33	C区　7層	土師質 杯？		6.4		糸切り痕	外内：浅黄橙色		底部の片
34	D区4層S	土師質	11	8	1.4	糸切り痕	外内：橙色と浅黄橙		体～口縁部の片
35	C区2層S	瓦				上部に溝が見られる	暗い灰褐色		右下角の片？
36	B区　2層	瓦					灰色		左端の一部
37	D区3層N	土錘	4.2	厚さ 1.3	孔径 0.35		外内：にぶい黄褐色		完形
38	D区5層N	土錘	4.1	1.5	0.5		外内：にぶい黄褐色		完形
39	D区5層S	土錘	4.8	1.5	0.5		外内：灰黄褐色，黒褐色		完形
40	D区4層S	古銭				寛永通寶			
41	B区3層N	煙管							
42	D区5層N	鉄器							鎌？



第10図　遺物実測図２（陶磁器類１）

2．陶磁器類

4は15ｃ後半の李朝の磁器で口縁部は外側へ大きく反る。5は15ｃ後半の中国青磁の碗で口縁部は大きく外側に広がる。6は15～16ｃの中国青磁の香炉で高台～体部の片が残っている。7は15～16ｃの瓦質土器の擂鉢で、口縁部は逆「八」の字に広がり、内側に膨らみをもつ。外側には指圧痕も認められる。8～10は中国青磁で、8は15～16ｃの碗である。9は15ｃと思われる壺である。10は16ｃのもので碗の一部である。11・12はともに中国青花で、11は16ｃ後半の碗である。12は、16～17ｃの鉢で口縁は外側に広がる。

13～16は唐津焼で、13・14は17ｃ前半、15は17ｃ中頃、16は17ｃのものである。13は皿の底部で、14の外側には一部にくすんだ赤い土が見られる。15は皿の口縁部で、16は碗の体部である。17は17ｃ後半～18ｃの青磁の碗と思われる。18は18ｃ頃の陶器の茶碗である。19は18ｃ頃の伊万里焼の磁器である。20は18ｃ後半の磁器の茶碗である。高台～口縁部の片で、底部が4分の1遺存している。21は18ｃの陶器の碗である。22は18ｃの陶胎染付である。23は18ｃの陶器の小鉢である。

24は19ｃ前半の萩焼の碗である。25は唐人焼である。26は肥前陶胎染付で、口縁部に凹みが見られる。27は須佐唐津である。28は備前焼擂鉢の底部の片である。29は逆「八」字状に広がる口縁部を持つ擂鉢である。25～29は年代が不明のものである。

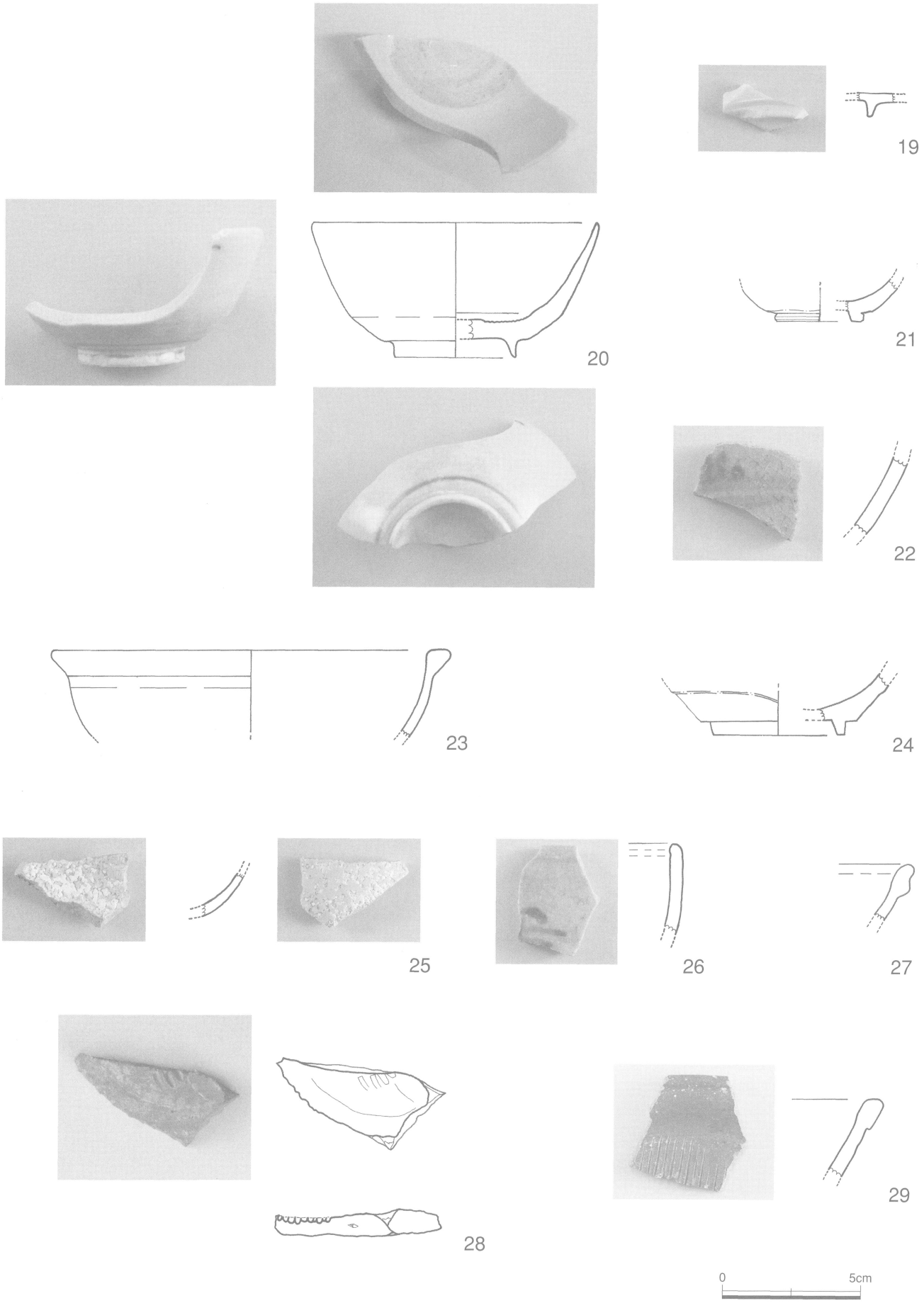
3．その他

30は18ｃの土師質の擂鉢で、高台～体部の片が遺存している。31は土師器皿で回転の糸切痕が見られる。32は鉢の底部と思われる。33は糸切痕のある杯と思われる。34は土師器皿で糸切痕が確認できる。31～34の年代は、いずれも17ｃ初め頃のものである。

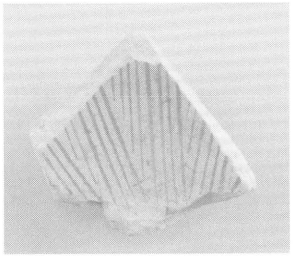
35・36はともに瓦で江戸期のものと思われるが実際の年代は不明である。35は暗い灰褐色で、上部に溝が見られ、右下角の片と思われる。36は左端の一部と思われる。

37～39は、いずれも土錘の完形である。3点とも年代は不明であるが、おそらく江戸期のものと考えられる。

40は寛永通寶である。41は煙管の完形である。42は鉄製の鎌の一部と思われる。錆に覆われており、正確な大きさや形は確認出来なかった。

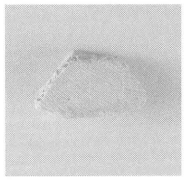


第11図　遺物実測図３（陶磁器類２）

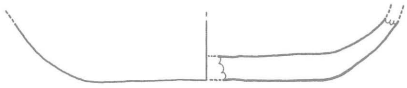


31

32

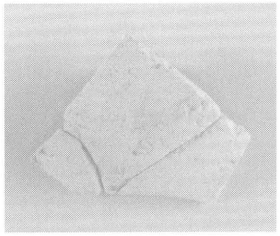


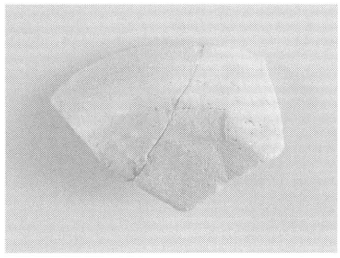
30

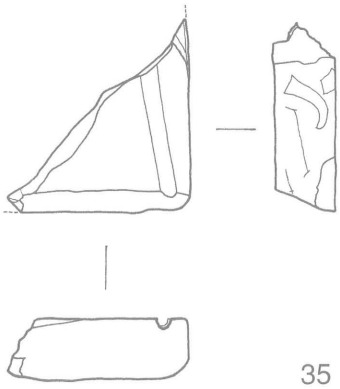


33

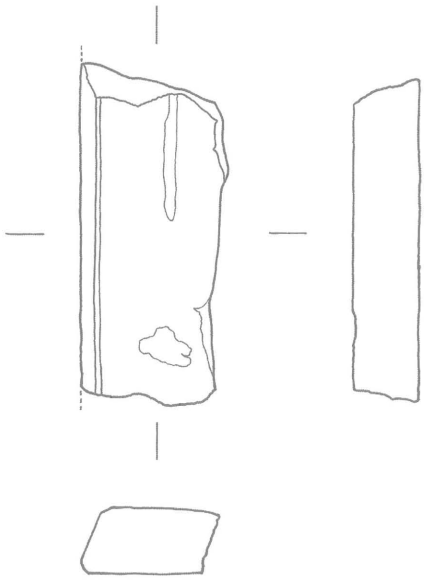
34



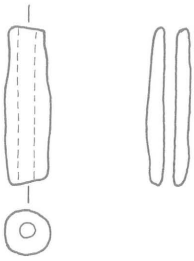




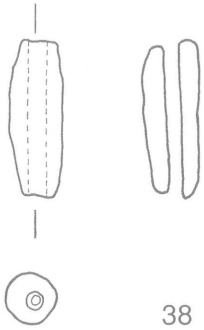
35



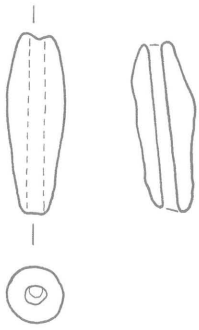
36



37



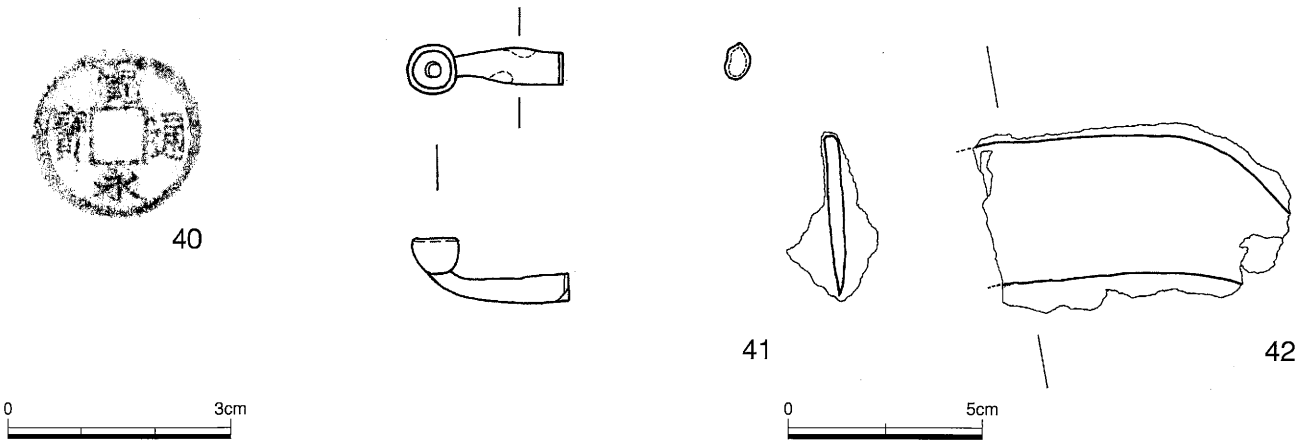
38



39

0 5cm

第12図　遺物実測図４（その他１）



第13図　遺物実測図５（その他２）

第5章　小　　結

本遺跡は、平成17年度に実施した試掘調査により遺跡の所在が確認されたものである。試掘調査での出土遺物は、ほとんどが江戸時代の陶磁器類であったため、本遺跡に隣接する青原代官所と同時代の遺跡であることが予想された。

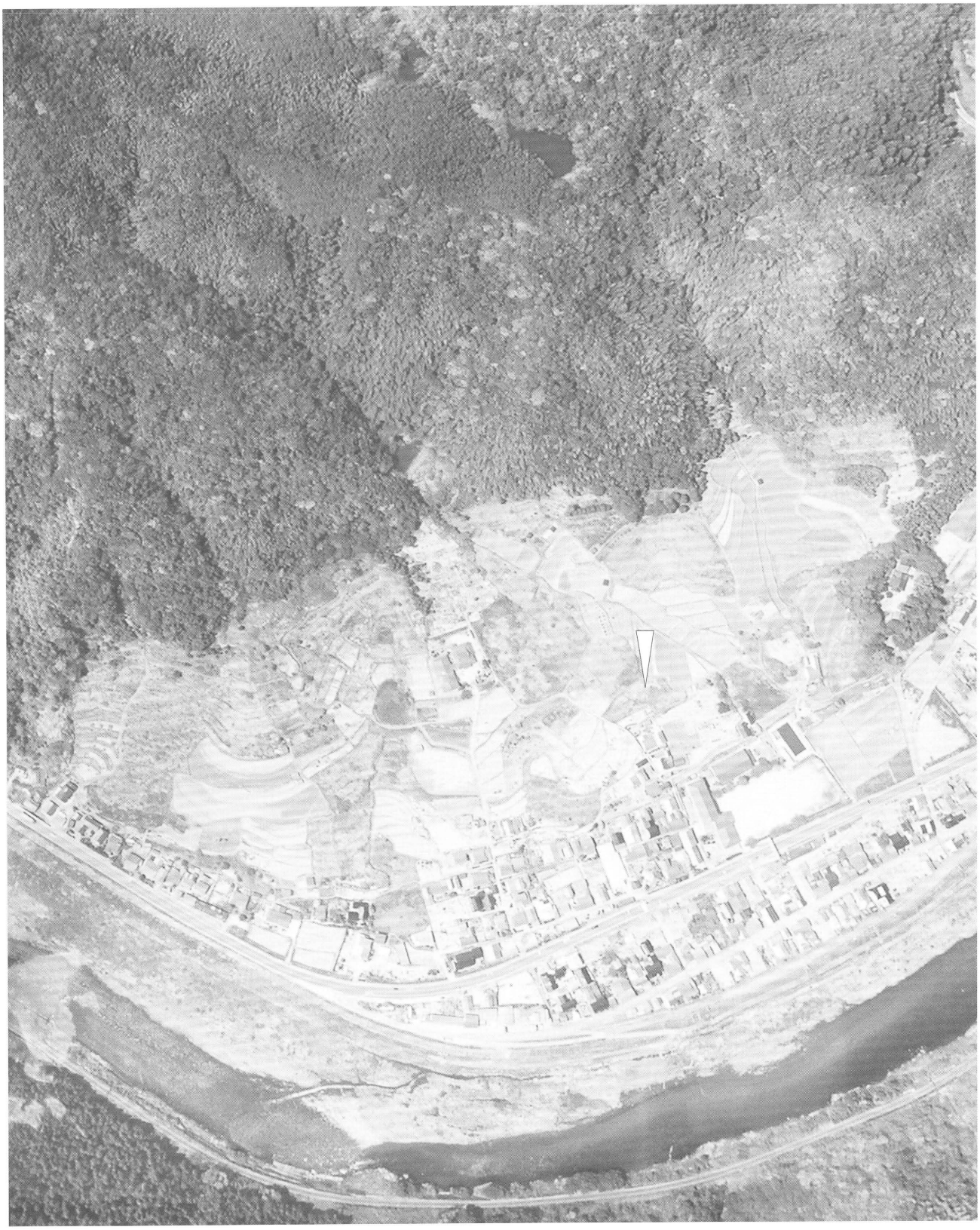
今回実施した本調査は、開発事業に伴う緊急の調査であったため、調査日数、調査面積とも制限された状況であった。しかも、第3章でも触れたように、水田開発等により当時の地形が大規模に破壊された状態で、遺物を収集する形での調査となった。そのため遺跡を正確な形で確認することは出来ず、しかも狭い範囲での調査のため、全体を把握できるものではなかった。そのことを最初に断った上で、以下気付いた点を記したい。

発掘調査の結果、地形や土層から判断すると、少なくとも3回の水田開発が行われ、最終的に現代の水田になったと考えられた。そして、西側は耕作土の下層が地山であり、東及び南側は低く、現況の高さまで盛土されていることが確認できた。おそらく西側の削り土を東側及び東南側の低い所へ埋めていると想像できた。想像の域は越えないが、もともとは調査区の西側が一段高い地形であり、そこに住居的な施設などがあったのではないかと思われた。また、遺物の出土状況から推定すると、石器類と陶磁器類が同層から出土していることや、遺構などがほとんど確認することができなかったことなどからも、幾度の水田開発により破壊されたのではないかと考えられた。

さらに、出土遺物から判断すると、16世紀以前の遺物も僅かに確認することができるが、多くは17～19世紀の陶磁器であり、代官所があった江戸時代に調査区周辺を含めて、人々が生活していた場所であることは明らかであった。

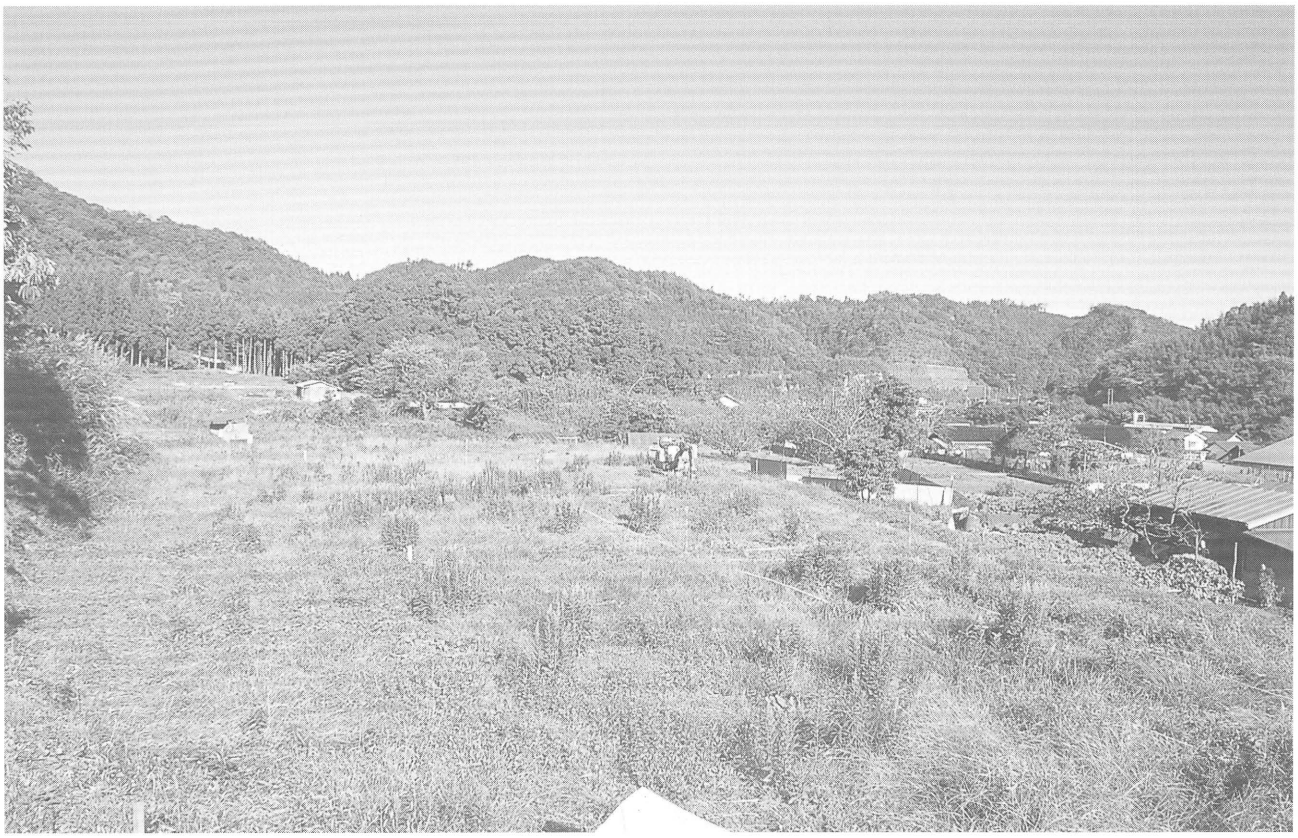
以上、発掘調査の成果を基に気付いた点を述べた。残念ながら本遺跡と青原代官所を関連づけるものは検出できず、また、本遺跡と隣接する青原代官屋敷遺跡と関連づける古墳時代の遺物等も確認することができなかったのである。

図版 1



1　調査地点鳥瞰

図版 2

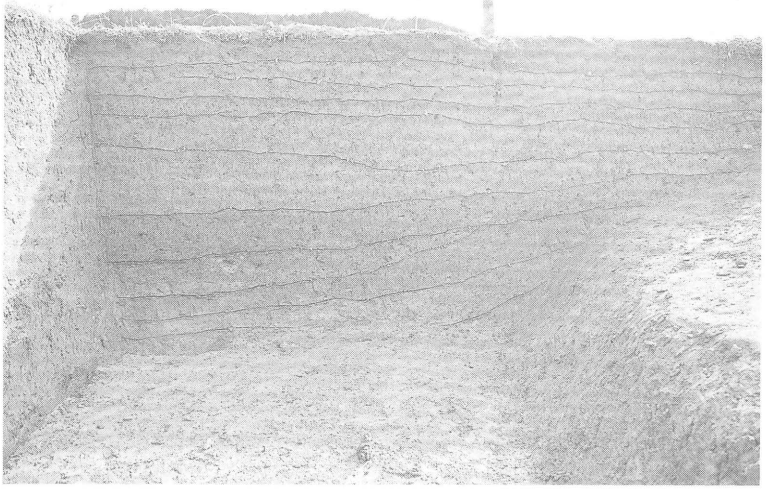


2　南からみた遺跡の近景

3　北からみた遺跡の近景

1　B調査区北壁

2　B調査区南壁

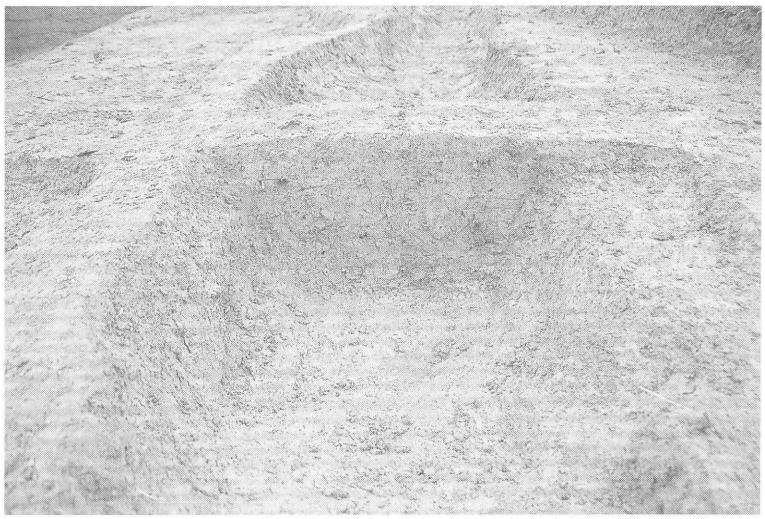


3　C調査区南壁

図版４

１　ＳＤ０１検出状況（南から）

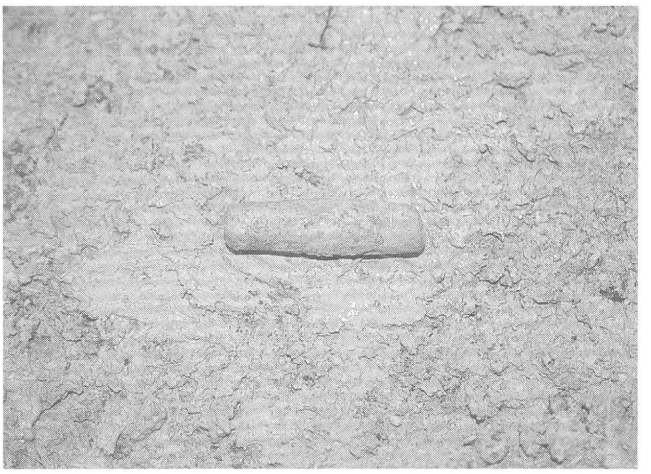
２　ＳＤ０１・０２完掘状況



３　ＳＤ０１土層（北側）

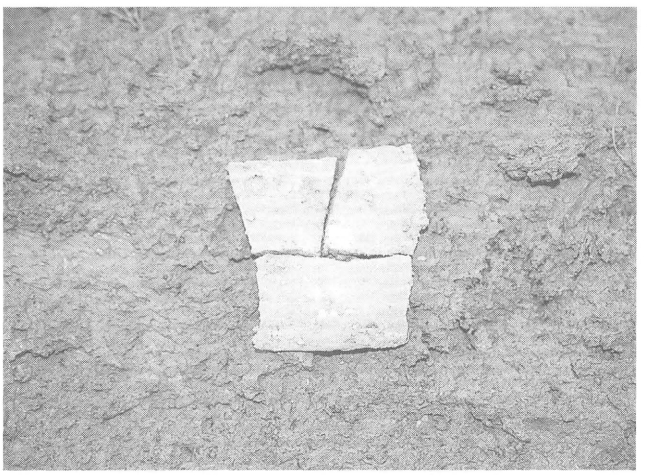
図版 5

1　石器出土状況

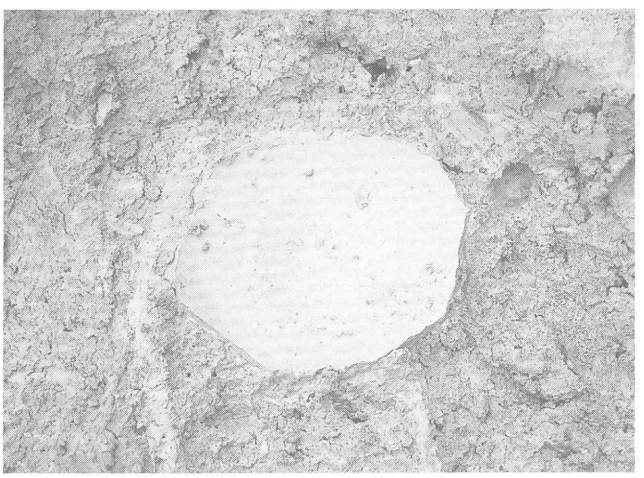


2　土錘出土状況

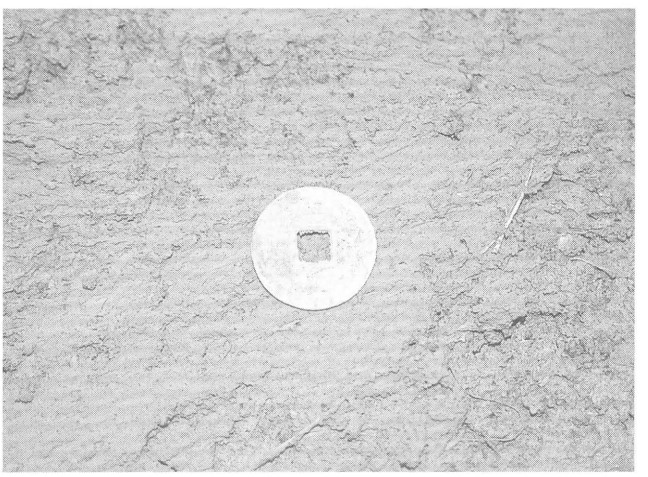
3　陶磁器出土状況



4　陶磁器出土状況



5　陶磁器出土状況



6　古銭出土状況

図版6

1　発掘作業風景

2　発掘作業風景

3　発掘体験授業風景（青原小学校）